

アトリエ 琉游舎 だより 77号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/

2020年4月22日発行

琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>花にあかぬ嘆きはいつもせしかども
今日のこよひに似る時はなし

(新古今和歌集巻第2春歌下105)

- 「新古今和歌集」にある在原業平の歌です。「桜の花を眺めれば、いくら眺めても眺めたりないという嘆きは春ごとにしてきたけれども、今宵ほどの深い嘆きはなかったことだ」業平には散りゆく桜への哀惜の情が今宵は格段に深い特別な何かがあったのでしょうか。
- コリーナの桜は1ヶ月の間楽しむことができます。一気に咲き散ってしまうソメイヨシノだけでなくさまざまな種類の桜があちこちに咲いています。ここが開発される前からあった山桜は、葉を落としたままの灰色の雑木林の山に点々と白やピンクの色を描きます。琉游舎前の山桜は他の桜が散り始める頃に咲き始めるここで一番遅咲きの桜です。そんな桜たちは今年もいつもと変わらぬように春になると咲き、雨が降り風が吹くと散っていきました。
- 桜の花はいつもと変わらないのに、それを眺める人の気持ちは日ごと年ごと人ごとにそれぞれ違います。特に今年の桜にそんな思いを強くした方が多かったのではないでしょうか。
- なにもかもがいつもの春と違う今年の春。今まで自分の気まま望むままに厚化粧と厚着を重ねてきた私たちの豊かな日々が直面するこの不自由な春。私はこれを嘆かず、恨みもせずに62年という年齢が纏ってきた重ね着を一枚一枚脱いでいってみたいと考えています。そうすれば今の私にとっての「あるべきよう」が自然と浮かび上がってくるはずです。そしてそこからまた琉游舎と私の「あるべきよう」が動き始めていきます。一人一人が自分の「あるべきよう」を見つめそのままに日々を過ごすことが出来れば、必ずやそこにはいつもと変わらぬ春がやって来るはずです。それは「今日のこよひに似る時」はない、自分だけの、今日だけの、今年だけの、いつもと変わらぬ「あるべきよう春」になることでしょう。

しばらく

「読書会」「写経会」「映画会」「詩話会」「居酒屋の会」

お休みいたします

- ★定例の会はしばらく休止しますが、琉游舎は毎日オープンしています。
- ★琉游舎はオープンスペース・24時間換気なので3密状態は作りません。
- ★本は時代小説からミステリーまで各種、CDも多彩なジャンル、映画も往年の名画などいろいろ。琉游舎内で読んでよし見てよし聞いてよし、家に持ち帰ってゆっくり観賞するもよしです。ぜひ琉游舎をご利用ください。
- ★定例の会が再開するときにはこの「琉游舎だより」でお知らせいたします。また以前と変わらぬようお越しくください。お待ちしております。

三年前のちょうど今頃、私は僧侶になるための最後の修行を身延山で行っていました。身延山はしだれ桜の名所で久遠寺の境内には多くの観光客の姿が見られます。道場の中に居ようと観光客の中に居ようと、私たち修行僧の周りには結界が張られているため、皆さんが居るいわゆる俗界という空間とは見えない境界線で厳格に隔てられています。35日間私たちはこの結界の外へ出ることは許されませんでした。ですから私たちが桜に見とれていたり、俗界の人と言葉を交わしたりすれば即刻結界からの追放を命ぜられてしまいます。つまり修行からの追放です。結界はただの観念の中の世界と言えはその通りですが、この信行道場での修行は外側から不浄なものが入らない結界の中での修行だと自ら「信ずべき」ことが大前提なのです。

よく修行は厳しかったのではないかと聞かれますが、五日も続ければこれが日常となってしまう、私は厳しいとかつらいと思ったことはありません。逆に毎日が決まった日課の繰り返し、次から次へとやることが決められてトイレに行く時間を見つけるのが精一杯。また外部からの情報はすべて遮断されているので、考える余裕も悩んでいる時間ありません。良く言えば自分の「信」と向き合うことだけに集中できる場、悪く言えば「信ずべき」ことに流されるままに身を預ければよいという場、でした。

この修行の場は信行道場と名づけられています。基本的な装束は白衣に素絹の法衣、五条袈裟。素足に白木の下駄。道場の外に出るときは網代笠をかぶります。雨でも晴れでも寒くても暑くても同じです。朝4時の水行に始まり行列唱題して本山（久遠寺）登詣、本山朝勤、祖廟（日蓮上人の墓）参拝、道場に戻りまた朝勤。ひたすら経を読み題目を唱えます。8時になってやっと朝食です。食事は12時と17時の三回でもちろん精進料理。修行中の私語は基本的にあり得ませんので、食事中も無言。食間に許されるのは水のみなので、三度の食事をきっちりとることが必要です。意識して毎食どんぶり一杯の飯を食べていましたが、琉游舎に戻った時は62キログラムの体重が56キログラムに減っていました。朝食後は掃除、そして課業です。夜の8時まで続きます。内容は講義と法要の実習、作務衣を着ての作務（草取りや清掃）となります。夜の8時から9時は入浴などの時間、そこだけが唯一身心が休まる時間です。9時に消灯。この日課の繰り返しと、何かをゆっくり考る時間や外部の刺激が全くない状況の中では、月日と曜日の感覚が一切なくなります。また世界で何が起こっても全く気にならなくなります。当時アメリカと北朝鮮の関係が相当緊張していたので紛争が起こるのではと言われていましたが、結界から戻ってきても世界も日本も私自身も何も変わってはいなかったのです。

日蓮宗の僧侶の資格を取るための修行であれば、この特殊な35日間を必要な35日間と考えて無難に過ごすことができます。だから修行から戻って何一つ変わっていなくてもあたり前です。しかしこの修行の私だけの真の目的は「何を信じて僧侶になったのか」を知ることでした。出家してみたものの「何を信じて」の部分が分からないままだったので人から出家の理由を聞かれても「宿世の因縁です」としか答えようがありませんでした。自分自身の「信」を認識し自覚するために私は修行に赴いたのです。ところが修行から戻っても世界も私自身も何も変わっていませんでした。35日間精進料理と素足で過ごした日々で得たものは「信」ではなく、日蓮宗の准講師の資格と法要の技術だったのです。修行の途中うすうす気づいたのですが、この信行道場の修行は僧侶になるための職業訓練の総仕上げの場であり、ここで「信ずべき」ことは結界という聖なる場で伝授される聖なる儀礼の技術、そしてそれを支える法華経と日蓮聖人の教えだったのです。

「信ずべき」と「信」は全く別ものです。前者は与えられるものです。人は与えられた数多の「信ずべき」ことから自分の願いを實現してくれそうなものを選択しそしてそれを信じているのです。では「信」はなんでしょうか。「信ずべき」ことが他者から与えられるものであるならば「信」は自ら獲得するものです。「信ずべき」ことが宗派の教えとして世間で共有されるものならば「信」は個人の信行の中に深化され特殊化されるものです。私たちは日蓮聖人や親鸞聖人などの祖師たちが「信ずべき」と語ったことを書物や代々の教えの継承によって知ることができます。しかし彼らの「信」を知ることができません。彼らの信行が唯一のものであればあるほど、その「信」は深くその人だけの「信」となっていくのです。それを教えとして語り記述したとき「信」は言葉として流布し「信ずべき」こととして人々の中に共有されていくのです。お釈迦様や祖師たちが獲得した独自の「信」は本来どうやっても人に伝えることも共有も不可能なのです。

私の35日間の信行道場の修行で知ったことは「信」は誰かからか教えられるものではなく、自ら獲得するものだということでした。「信ずべき」ことはその獲得の手段と手掛かりです。私にとってのそれは法華経と日蓮上人の教えだったわけですが、実はそれは何でもいいはずで、自分にふさわしく親和性のある「信ずべき」ことを頼りに、自分だけの「信」を見つけること、それが宗教のある毎日の生活なのです。宗教とは何かという難しい問いに答えるならば、私は「世の中に数多ある『信ずべき』ことから自分に優しいものを選びそれを手掛かりに自分だけの『信』を見つけようとする日々を生きること」と答えたいと思います。

時々信行道場の修行が懐かしくなることがあります。朝4時の水行は裸で水行肝文を唱えながら冷たい水を頭から10回ほどかぶる行です。よく風邪をひきませんでした。成人以来最長の35日間一切アルコールなしで過ごしました。禁断症状は出ませんでした。肉魚を食べなくても息切れすることはありませんでした。かといって、今琉游舎でおなじことをしようとも思いません。「信」は結界の中の特別な 琉游舎：戸井 出琉・恭子
お問い合わせ先：0287-53-7848 08033508152
矢板市大槻2319-17コリーナ矢板C-850
日々の中ではなく、ごく当たり前の日々の中にあるからです。